

第 58 回(2011. 9. 10 配信)

雲竹齋先生の歴史文化講座―「中東・アラブ社会 (6)」

遊牧の民ベドウィン(アラブ人の原点)

アラブ人は言語学的に「セム語族」で地中海人種の一つだが、アラビア半島に取り残された一部が定着し、独自の発展をしていったのだろうという。セム語族とは、喉元や口腔の上部から発音される独特な言語をもつ民族だが、メソポタミア文明を興したシュメール人を滅ぼしたアッカド人以後、アッシリア人、バビロニア人などの民族はセム語族で、フェニキア人や昔のパレスチナ人が使っていたカナン語、今でもシリアの一部で使われているアラム語、イスラエルなどのユダヤ人が話すヘブライ語もこの系統だから、そのルーツが同じセム語族である。一方、セム語族に対比される民族が「ハム語族」で、これは古代エジプト語、コプト語、エチオピアのクシト語、北アフリカのベルベル語などを話す民族がこの仲間とされている。ベルベルという言葉は「バルバルス」というラテン語から来ており、ローマの文化圏外に住む野蛮人という意味で、北アフリカに多い民族である。ローマ軍を撃破したカルタゴの有名な将軍ハンニバルもベルベル人である。なお、セムとかハムとは、『旧約聖書』に出てくる「ノアの箱舟」のノアの息子の名前である。

アラブ民族の起源はアラビア半島南西部、現在のイエメンであり、その祖であるカハターンの息子ヤーリブがアラブの語源だという伝説がある。山や丘の多いイエメンでは、その昔大きなダムが建設されて、灌がい設備が発達している豊かな国があった。それが「シバの女王」で有名なシバ王国で、ある日ダムが決壊して一瞬にして国は壊滅し、助かった人々は四方に散って行った。これがアラブ諸国の人々の先祖だという人も多い。シバの女王と古代イスラエル王ソロモンとの間に産まれた子供が、後のエチオピア王朝の祖であるというが、これはあくまで伝説である。イエメンは山もあり降雨量も中東としては多く、当時は豊かあったに違いないから人口も膨れ上がり、次々とアラビア半島を北上したのだろうが、そういった意味においては、南西アジアや中央アジアにおいても、人口の増加による人々の流出もあっただろう。この地方の住民は、古代東アフリカや北アフリカ、あるいはアジアの民族が、その民族移動の過程において、文明の十字路ともいべきアラビア半島で交叉し同化を繰り返して中東一帯に広がっていったと見るのが妥当である。

都市に定住せずに遊牧を生業として砂漠を流浪する多くの砂漠の民を「ベドウィン」と呼んでいるが、彼らは細かい砂粒だけの砂漠の周辺の、時にはほんの少しだが雨が降る荒れ果てた土漠に僅かに生える草を求めて、牧畜を生業とする民族である。本来ベドウィンとはアラビア語のバドゥ(町に住まない人)から来た言葉だが、町に住む人たちは「アラビア半島の向こうからやって来た人」という意味で、彼らを「ベド」あるいは「アラブ人」と呼び、しかも都市に住んでいないから文明に遅れた人ということで、多少この言葉には軽蔑した意味も含まれているようである。この遊牧民がアラブ人の原点だという。

ラクダの瘤には水は入っていない

この雲竹齋がラクダに乗って旅をしていたと思って、「素敵だ」とか、「うらやましい」などと言う者がいる。なかには、「なんとロマンチックな」などと勝手に想像してうっとりとする女性もいるが、フランス製プジョーのセダンを乗り回していたと言うと、本当に中東に住んだのか、と疑いの眼差しで見ると困る。今どきラクダに乗って旅行する人などいない。遊牧の民ベドウィン族でさえも、今はほとんど大型トラックに天幕を積んで移動する。ラクダの隊商キャラバンなどは、アフリカのサハラ砂漠に近い一部の地方に見られるだけで、近距離の移動以外ほとんど見られない。いくら砂漠が多いところだといってもバカにしてはいけない。立派に舗装された広いハイウェイが縦横に走って

いる。もっとも、風が強い日には舗装した道路に砂漠の細かい砂が吹き付けてくるから、運転が下手な人はスリップして横転する。日本のように交通警察がうるさく取り締まるわけではないから、走るスピードも半端なものではない。スリップしたら確実に神様や仏様のもとに行くことができる。

どこで聞いてきたか知らないが、「ラクダの瘤には水が入っているから、砂漠のような水がない場所でも10日や20日間ぐらい平気だ」と、友人が自信たっぷりに言った。横で聞いていたもう一人が、「やはり、ラクダの背中でチャッポン、チャッポンという音がするのか」などと、くだらないことを聞いてくる。冗談ではない。背中から水の音など聞こえてくるわけがない。あの瘤の主成分は水ではなく脂肪分である。脂肪が燃焼してエネルギーになるから、たしかに少くとも生きていられる動物なのだろうが、10日や20日も平気いられるとは思えない。ラクダをたくさん飼っているアラブ人に聞いたことがあるが、彼は笑って言った。「数日間は大丈夫だろうが、それ以上は無理だ。まあ10日や20日も水を与えなかったことはないが、爺さんに聞いた話では、砂丘を何百kmも踏破することはしない。キャラバンの一日の走行距離は20~30kmだから、通路にあたる砂漠、といっても砂丘ではなく土漠だが、そこには、およそ100kmおきに井戸が掘られている。だから、4日から5日おきに水をやらなければいけないと教わってきた」

キャラバンの行程のほとんどは、絵本や写真で見るとような砂丘ではなく、荒れ果てた「土漠」地帯である。そこには、場所によっては風に飛ばされた細かい砂の山が存在するが、若干の雨も降ることもあり、多少の植物もわずかではあるが生える瞬間がある。自然に水が湧き出るオアシスや、井戸を掘って水を得ることができる場所が皆無ではない。また、こういったところではカナートあるいはカレーズと呼ばれる、暗渠式の水利施設がある。ほとんどは、数十km先の井戸から地下に隧道を掘り、およそ50mおきに縦穴を掘ったもので、この井戸によって定着民が家畜に水を飲ませることができる。それだけに井戸は大事な財産であり、命の次に大切なものだから、だれもが勝手に使っていないものではない。もしも他人が断わりも無く井戸水を使ったら殺される。それが砂漠の掟である。

いずれにしても、キャラバンは過酷な旅であることは間違いない。したがって、キャラバンの隊長や一族の族長の責任は重大である。だから、遊牧民族の族長は世襲ではない。六感の優れたものが選ばれるのは、そういった理由によるものだという。

ラクダに乗るのは楽ではない

多くの友人たちは、ラクダでの旅をしてみたい、と思っているようだ。「いいなあ」といってうっとりした顔をする女性もいる。きっと童謡にある『月の沙漠』を連想しているのに違いない。ラクダの目は二重に生えている長いまつ毛で砂塵から保護されているし、鼻の穴も閉じることが出来るから、砂漠や乾燥地帯に強いラクダは、昔から人々の重要な運搬手段だった。キャラバンの人々の食事は一握りのナツメヤシの実とラクダの乳だったというし、ラクダの毛は衣服や天幕の布地に織られたから、乾燥地帯の中東にはなくてはならない存在だった。そこから「砂漠の舟」とも言われるようになったのだが、ラクダで旅をしたいと思っている人はとんでもない勘違いをしている。

写真などで見るラクダは愛嬌のある顔をしていると言う人も多い。また、大きいから馬よりも楽な乗り物だと思っているらしい。ところが、ラクダは馬より大きな動物だから、長い両足を折って座らせてからでないと乗れないが、ラクダが起きあがるときに前足をたてると、リーチが長いから、乗っている人は後に放り出されそうになり、後ろ足を立てると、今度は前に投げ出されそうになる。アジアの二つ瘤ラクダと違って、中東のラクダはひとつ瘤で背中が三角形に盛り上がっているから、一般には瘤の前か後に鞍を取り付けてまたがる。目の前にある鞍の突起を右膝で抱えるように巻き、その足首を左足の膝で押さえて安定を計るのだが、慣れないと非常に安定感が悪く、またこの動物は気性が荒いので、油断していると振り落とされることがある。また、牛と同じ反芻動物だから、しょっちゅう口を動かして、時々「ゲボ！ゲボッ！」と胃液や唾液の泡を吹くから、風向きによっては耐えられないほどの臭い泡が顔に当たる。

「中東に行ってラクダに乗ってみろ。観光用じゃなく、街外れにいるラクダに半日くらい乗ってみれば、ラクダから落ちて骨折するか、ケツの皮が剥けて、股擦れして帰国する羽目になって、こんなものではるばると旅なんか出来るわけがねえってことがわかるだろうよ。まあ、おめえなんか鳥取の砂丘で観光用のラクダに乗って喜んでいるのが無難だなあ」

そう憎まれ口をたたいて鬨感をかっている昨今である。